

十二月十四日 つづき

十八時過、青山ときの忘れもの。秋の展覧会の作品にサイン入れる。何がしかの版画に彩色を施す。綿貫夫妻、室内塩野君と食事。ヴェトナム料理。食事後塩野君とアルクール。久し振りに勝ちやんに会う。二十四時過世田谷村。

綿貫さんから、「ひろしまハウス」の巡回展について提案があり、お寺を巡回してゆくのも面白いナアと言う事になった。

十二月十五日

昨日塩野君から渡されたナイトスタディハウスのレポートを読む。

豊島区北教会の芳賀繁浩牧師の「西早稲田観音寺」に関する工ツセイを興味深く読んだ。「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」というヨハネの言葉をその中に見い出して、とても懐かしい思いにかられた。気仙沼の日の出岫仙人高橋純〇（すみお）さんを思い出したからだ。高橋純〇さんは宮城県気仙沼に私が通っていた時に友人になった人物で、話せば語り尽せず、とめどなくなるので、知りたければ『現代の職人』（晶文社）に書いてあるので一読されたい。要するに高橋純〇さんは本物の純粹さのよくなものを持っていた人で、それを自覚せざるを得ない現実にとり囲まれていたからこそ、自分の名の純夫がイヤでたまらず、純〇（じゅんぜ〇）と名乗ったのだ。そんな人だった。それで気仙

沼では変人奇人としか受けいれられぬ人であった。

高橋純〇さんは亡くなり、私は気仙沼に出掛けて甲辞を述べた。その時に私が高橋純〇さんに贈った言葉が、「預言者故郷に容れられず」であった。

気仙沼の人のみならず、広く俗世間は高橋純〇を良く理解できなかった。理解したとしても、それを認める事は自分達の品性の卑しさを認めざるを得ぬ事と同義であったのだ。それ故、彼の言動に耳を傾けること少なかった。見て知らぬ振りをし続けた。言ってみれば、彼は世間に稀有な芸術家であった。

私には高橋さんはまぶしい人であった。かなわぬ人であった。私は私の中の俗人を良く知っている。それがイヤでたまらぬ事も多いが、それから抜け出せぬ自分の現実を知っている。それ故芳賀牧師が私の俗な身振りを眺めて、預言者の如くになぞらえてくれても私はただ身の置き処に困るばかりだ。

預言者のくだりはともかく、芳賀牧師は観音寺設計の中心を良く直観していると考えた。時に設計者である私よりもその形、材料の意味を適確につかんでいるところがあった。設計は欲している意志に実体を与える作業だ。そして、常に意志そのもの、思考つまりロゴスよりも物質の現実が厳然としているものなのだ。それ故に、設計されて出現した物体は設計過程の諸観念とは無関係な物質として、そこに在る。だからその物体を体験して得る体験者の観念は設計者のそれと遠く離れていて当然なのだ。その意味では体験者も又、創作者である。

悠久の時間を形にする事はできぬ。しかしながら悠久、つまり永遠への渴望というような気持を造形する事が宗教建築の中核であろう。絶対者、超越者に対する帰依の気持とは自分の卑俗の認

識とそれから離脱の実践の意志だ。宗教者とはそれに尽きる。芳賀牧師も又、その意志の生成、変転の只中におられるのだろう。希求しても得られぬ悠久の時、求めても得られぬ故に、そこに慈愛という、キリスト教で言えば愛、仏教でいえば哀しみ、の観念が宗教者、信者の相互に生まれてくる。宗教建築がその中枢に持たねばならぬのはこのニュアンスだ。

芳賀牧師は観音寺を体験して、色々な感慨、観念を得られた。それこそが観音寺の作品である。観音寺はその作品を媒介し、契機になったのである。観賞者あるいは観相者の想像力は時に制作者のそれをはるかに超える事がある。

広島の本本君より待ちかねた手紙が着いた。石灯ろうの件で、早速、四KMほど離れたところの河原から石を沢山集めて、その幾つかを写真にとって送ってくれた。

非常に面白い。近来にない面白さだ。

何年も前から石の姿に関心が湧き始め、それが建築の姿形のスケッチを生み出したりする迄になっていた。しかし、初めて本本君の力を得て、それが一歩進んで、その関心が形になり始める予感がある。

今日は本本君に手紙を書いて、それでよし。つまらぬ事は、こつこつにはしない方がよい。